

# 子育てコラム

内郷・好間・三和地区保健福祉センター

家庭相談員 片見 慎一

2022年10月発行 No 6

日常生活の中で、何気ない言葉で、うれしくなったり、悲しくなったりした経験はお持ちでしょうか。人類にとって言葉は、相手と意思疎通を図るために獲得した有効なコミュニケーションツールの一つです。このコミュニケーションツールを使って、私たちは日常会話、インターネット、SNS等で相手との意思疎通を図っています。



子育てにおいても、いろいろな人との交流を深める手段としてこのコミュニケーションツールを使って、有意義なひと時を過ごすことができます。しかし、このコミュニケーションツールの使い方を間違うと、相手を苦しい状況に追い込んだり、自分が苦しい状況に追い込まれたりすることが考えられます。それによって、自己肯定感が低くなりがちです。

何気なく使っている言葉について、明治大学文学部の齋藤孝教授の著書『心が強い人はみな、「支える言葉」をもっている』(発行所:株式会社アスコム)では言葉の持つ重要性を取り上げています。次の項目でそのことについて再認識・再確認をしていけたらと思います。

上記の齋藤孝教授の著書は過去から現代までの著名人の名言を30取り上げ、5つの場面(くじけそうなとき、背中を押してほしいとき、成長したいと願ったとき、人付き合いに悩んだとき、道に迷ったとき)を想定して、それに見合った名言を振り分けています。その中から、2人の著名人の名言を取り上げて見ていくたいと思います。

くじけそうなときの場面で、齋藤教授は、赤塚不二夫の漫画「天才バカボン」の中で、バカボンのパパがよく口癖にしている言葉を『支える言葉』として取り上げています。その言葉は、これでいいのだです。皆さんも聞いたことがあるのではないでしょうか。齋藤教授は、この言葉にすごい力を感じ、自分に自信が持てず、肯定してほしいときにこの言葉を言うと、『勢いがついて先に進める。自分を肯定し、状況を肯定して前に進むのです。肯定するからエネルギーが出ます。そして、状況を好転させていくことができます。』と評しています。



背中を押してほしいときの場面では、童謡詩人の金子みすゞの童謡集「わたしと小鳥とすずと」の中の一節を取り上げています。その言葉は、みんなちがって、みんないいです。この詩の内容は、大体次のようなものです。『小鳥は飛べるし、すずはきれいな音を出すことができます。わたしにはそれはできないけれど、わたしも、小鳥やすやすにできないことができるとしてみんなちがって、みんないい』と締めくくっている。わたしと小鳥とすず、それぞれに良さがあります。だから、それでいいのです。『すべてのものがそのまま素晴らしい存在なのだと認めると、自分のことも認められるようになります。』と齋藤教授はこの詩のもつ『人はそれぞれ、当たり前にみんな違う』というメッセージを再認識し、活かしていくことの重要性を話しています。

30ある名言の中でも上記2つの言葉は、子育てに密着する言葉ではないかと感じて、私は取り上げました。



子育ては、どのように行っていったらよいか迷いの連続です。唯一参考になることとして、物心ついた頃に自分の親が自分にどのように関わってくれたかです。しかし、それを参考にして自分の子どもにあてはめても対象が違うので、同じようには行きません。ましてや自分の子どもだからと言って兄弟姉妹すべてに同じ対応をしてうまくいきません。

兄弟姉妹一人一人みんなちがって、みんないいと親が受け止め、この子には これでいいのだと親なりの考え方を決めて子育てを行う、この繰り返しが子育ての醍醐味ではないでしょうか。